



「一」の字では書き終わりの方

国語辞典の話 その2

(続き) 実は「右」のこの定義、岩波国語辞典の「①相対的な位置の一つ。東を向いた時、南の方、また、この辞書を開いて読む時、偶数ページのある側をいう。」のパクリなのだそうだ。

『辞書を編む』の著者は、「こ…これって、パクリ? 思わずそう言いたくなります。でも、編纂者(当時の編集主幹はまだ見坊豪紀だった)の意図は、そうではなかったと思います。すでに『岩波』の「右」の語釈は世間に知れ渡っていました。その語釈をあえて使うということは、『三国(三省堂国語辞典)』は『岩波』を支持する」という表明だったのでしょう。」とした上で、「そうだとすると、『三国』の「右」(同様に「左」も)が独自性に欠けることは否定できません。これは手入れの対象になります。」とする。

その結果、今年の年末に発売予定の第7版では、「①横に<広がる/ならぶ>ものうち、一方のがわをさすことば。「一」の字では、書き終わりの方。「リ」の字では、縦の長いほう。」という語釈に変えることになったそうだ。この語釈に関する筆者の思い入れについては『辞書を編む』を読んでもらうしかないが、まあ、この手のことが好きな人にとっては、なかなか楽しい話題である。

*

この『辞書を編む』の中で、筆者は色々な国語辞書の特徴を説明してくれている。いくつか引用してみよう。

○「そのことばが正しいか間違いか、判断を求めたい人」にとっては、『岩波国語辞典』『明

鏡国語辞典』が向いています。『岩波』では、たとえば「何気に」という言い方は<1985年ごろからの誤用>と記しています。『明鏡』では、「違う」を「違く」と言うのは<誤り>として、<×実力はそんなに違くない→○そんなに違わない>と、正誤を○×で示しています。

○「そのことばが、いつ頃から使われているかを知りたい人」にとっては、『新潮現代国語辞典』が向いています。明治以来の文献が豊富に引用されています。

○明治以前の文献も含めて調べたい人には、中型辞典の『新潮国語辞典』、さらには大型辞書の『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』、超大型辞典の『日本国語大辞典』全13巻が役に立ちます。

○「そのことばについて、その辞書なりの解釈を知りたい人」にとっては、何と言っても『新明解国語辞典』が向いています。改めて紹介するまでもないほどですが、たとえば「読書」の項目では、4行を超える独特の語釈が続きます。さらに、<寝ころがって漫画本を見たり電車の中で週刊誌を読んだりすることは、本来の読書には含まれない>と、だめ押しの一言が加えられています。

*

筆者の関わった『三国』は、「そのことばが、今、広く使われているかどうかを確かめたい人」に向いているそうだ。iPhoneやiPad版、アンドロイド版もあり、手でページをめくるような感じで検索ができる工夫がなされていて面白い(使い易くはないが…笑)。